

ほなひ歴史通信

第93号

2019(令和元年).12.1

災害から大子の歴史と文化を守る

添田 仁

泥水をかぶった帳面を二頁ずつめくり、その間にキッチンペーパーを挟んで、水を吸ったら取り替える。カビをまとった掛け軸を開き、カビをこそぎ落としてからエタノールを吹きかけて陰干しする。足元がぬかるむなか、マスクと手袋をつけて黙々と。

台風一九号は県内でも猛威をふるいました。豪雨で久慈川や那珂川が氾濫し、濁流が川沿いの家屋や田畑を呑み込みました。現場を歩くとたび、浸水被害の大きさに驚かされます。

台風一九号は文化財も傷つけました。大子町でも町内の指定文化財に一件の被害がありました。一方、未指定の文化財は被害の状況さえもつかめていません。個人のお宅などに保管されている古文書、美術品、民具など、地域の歴史や文化を物語る品々です。しかし、その管理は多くが所蔵者や地域の人びとの努力に頼っているため、今回のような災害が起こると、ひとたまりもありません。被害の確認調査はもちろん、所在さえ把握することが難しいのです。

茨城史料ネットは、被災した未指定の文化財を救い出し、洗浄や修復を行い、新たな歴史の発掘に活用することを目指すボランティア団体です。二〇一一年七月、東日本大震災を契機に、茨城大学で歴史を学ぶ学生や教員が中心となって結成されました。二〇一五年

九月、鬼怒川が氾濫した関東・東北豪雨でも、被災地の常総市内を巡回して、水損した古文書や美術品を救い出しました。現在もこれらの修復と復元を続けています。

関東・東北豪雨で汚水をかぶり、異臭を放っていた、ある村に伝わる数枚の古文書。水洗いして乾燥、繋ぎ合わせて読んでみると、意外な風景が甦りました。江戸時代、何度も川が氾濫して家屋や田畑に浸水したことを受けて、被害を最小限に抑えるために複数の村が協力し、集落を囲む全長三キロの堤を築いていたことが明らかになったのです。川のそばで水と付き合いつつ暮らしてきた先人の知恵と教訓を伝える古文書。未指定の文化財は、世界遺産や国宝にはない、地域に根ざした魅力を備えているのです。

茨城史料ネットはいま、台風一九号の被災地で活動しています。水戸市や常陸太田市では、泥水をかぶった文書や掛け軸を見つけて、吸水・乾燥の処置を施しました。とくに紙素材のものは、水をかぶって数日経つと臭いとカビがひどくなり、ゴミと一緒に捨てられてしまうため注意が必要です。大子町内は大丈夫でしょうか。大子に生きた人びとの歴史と文化が刻まれた唯一無二の文化財です。お持ちの場合は捨てないで、大子町教育委員会や茨城史料ネットにご一報ください。

(茨城史料ネット事務局長／茨城大学准教授)

被災した歴史資料やご所蔵の歴史資料についてお困りの際は、

茨城史料ネットまでお気軽に情報をお寄せください。

【連絡先】

〒311-0185 茨城県水戸市文京1-1-1

茨城大学人文社会科学部添田仁研究室

電話：〇二九-218-1118

E-mail: hitoshi_soeda_carp@vc.ibaraki.ac.jp

【ルポ】台風一九号上陸後の大子町を歩いて

令和元年十月十二日十九時頃、台風一九号によって強まる風雨の中、筆者は水戸市内の自宅に戻った。筆者の自宅は台地上の高台にあるため、大きな台風被害を受けることは心配していなかったが、水戸市内の那珂川沿いの地域とともに出身地である大子のことが気にかかった。日付も替わる頃、中世以来の町場である大子の中心部が浸水被害を受けているらしいことを知った。果たして、大子町の文化財は大丈夫なのか。そして、自分には何ができるのか。不安と焦燥の中、台風の夜が明ける。

水戸の台風被害の全容も気になる中、大子町で仕事がある十月十五日に現地の様子を見に行くことに決めた。とりあえず、被害状況を見て今後の対策を考えようと思い、車で大子町へと向かう。

国道一一八号を北上するにつれ、思いのほか増水被害が深刻であることに気が付いた。SNSで情報を得ていた常陸大宮市神奉地付近はもちろんのこと、道路のいたる所で浸水の跡が確認できた。大子町内に入ると、西金や下津原等、報道では取り上げられていない地域でも大きな被害を受けていることも徐々にわかってきた。

大子の市街地に到着した頃、予定していた仕事が延期されるとの連絡を受け、一日時間を確保できることとなった。洪水などで水損被害を受けた歴史資料にとって一番怖いのが、そのまま捨てられてしまうことだ。そうなってしまう前に、少しでも手を打てればと思いい、被害地域のパトロールを始めた。

市街地を歩いてみると、思ったより物が路上に無いことに気づく。水が引いた後の跡片付けのスピードが速いのだ。復旧が急ピッチで進むうれしさの反面、歴史資料が気になる。そこで、災害ごみが運ばれる集積場を見つめることにした。大子町役場西側集積場に向かってみると、もうすでにごみが高く積みあがっている。この状態では、ごみの山の中から歴史資料の有無を確認するのは困難であった。

次に向かった町営グラウンドの集積場も同じであった。うず高く積みまされたごみの中に見える家庭のアルバムも気になったが、手を付けるのは困難であった。

災害ごみが出ていそうな場所を回るのも非効率であると気付き、『大子町史』編纂時に把握された資料所蔵者宅を直接当たってみることとした。幸い、大子町の歴史資料の被害を心配した、茨城大学の添田仁先生から、資料所蔵者の情報を事前に提供いただいたため、訪問する場所の見当は付いていた。

台風直後の被災地で、生活の復旧に急ぐ住人に歴史資料のことで声をかけるのはためらわれる。しかし、歴史資料を守るためのチャンスは今しかない。河川沿いに位置する所蔵者宅を訪問してみた。八軒ほど訪ねたところ、幸い歴史資料が被害を受けたという情報はなかった。床下浸水を受けたお宅もあったが、家の内部までは水につかっっていないようだった。

しかし、台風被害とは別に、地域が抱える歴史資料の問題に気が付くことになった。『大子町史』編纂終了から二五年程経過した現在、所蔵資料の家庭内での引継ぎが上手くいっていないようだった。所蔵者にうかがったところ、歴史資料があることを知らない方もおり、資料の所在が不明になってしまっているお宅があった。また、完全に空き家となってしまう、所蔵資料の確認をするのが困難な家も見受けられた。地域に残る歴史資料の状況を継続的に注視していくことの重要性を痛感した。

日没近くなったため、作業を中止して、水戸へと戻ることとした。まだまだ報道の少ない大子町の現状を伝えようと、茨城史料ネットを通じて、現地のレポートを全国に発信した。(藤井達也)

十月十五日に現地をうかがった際に、大変な状況の中、快くお話を聞かせていただいた皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。大子町の一日も早い復興を、心から祈念いたします。



【被害が甚大な久野瀬地区から久慈川を望む】



【浸水被害が確認される矢田地区】



【水損して廃棄される文書類】



【災害ごみの中に埋もれたアルバム】



【急ピッチで進む片付け作業】



【水をかぶった公文書】

私のマラソン人生 (二)

小室 健一

保内郷一周駅伝競走大会で経験をした喜びと自信は、私が中学校卒業後の進路を決める上で大いに生かされました。兄のアドバイスもあり、当時茨城県内の高校では長距離走の盛んだった茨城県立水戸農業高等学校に進学する事を決めました。その目的は、陸上競技部に入る事でした。

陸上部に入部したものの、中学校時代には自分流で走っていただけで本場の練習をしていなかった私は、一年間はいつも一番後ろを走っていました。他の一年生は、中学生時代に県大会でも上位を走っていた選手でした。当時私は、マラソンシューズなるものを知りませんでした。練習で履いていた靴は現在放映中のNHKのドラマ「いだてん」に出て来る金栗四三が履いていたようなマラソンタビでした。それは、保内郷一周駅伝で青年会からいただいたものでした。他の部員はマラソンシューズを履いていましたが、私はしばらくの間はマラソンタビで練習をしました。それにも関わらず一年間頑張り抜いたおかげで、二年生になると先頭集団で走れるようになり、大会にも出してもらえるようになりました。先輩から譲り受けたユニフォームは古いものでしたが、それを着て走れることが誇らしく思えました。練習にもやる気が出て記録も上がっていききました。

昭和三十四年十二月、第一〇回全国高校駅伝に出場することが出来ました。水戸駅前で応援団、生徒、父兄らによる壮行会に見送られて駅を発しました。大会は、大阪市内に設けられた毎日マラソンのコースを利用し、四二・一九五キロメートルを七区間に分けて行われていました。当時は、新幹線も無い時代なので東海道線を利用しての長旅になり、全日程一週間の大会参加でした。大会では六区(五キロ)を担当し、タイムは一六分四五秒で自分の力を出し切っ

て走ることが出来ました。チーム順位は、六一チーム中二七位でした。

それがきっかけで、日立製作所水戸工場に誘われ、入社しました。社会人として、実業団競技者としての一步を踏み出しました。会社では特別な練習時間はくれませんでした。それでも大会に出て悔しい思いはしたくないので、自分の時間で練習をするしかありませんでした。朝夕の通勤時間を活用して、朝は水郡線の瓜連駅で降りて会社まで走り、帰りは会社から走り、途中駅で乗りました。昼休みにはスピード練習をやる、そんな練習のおかげで自分としての走りは出来たと思います。(続く) (大子町在住)



水戸農業高等学校陸上競技部の頃の筆者

偶然の巡りあわせ

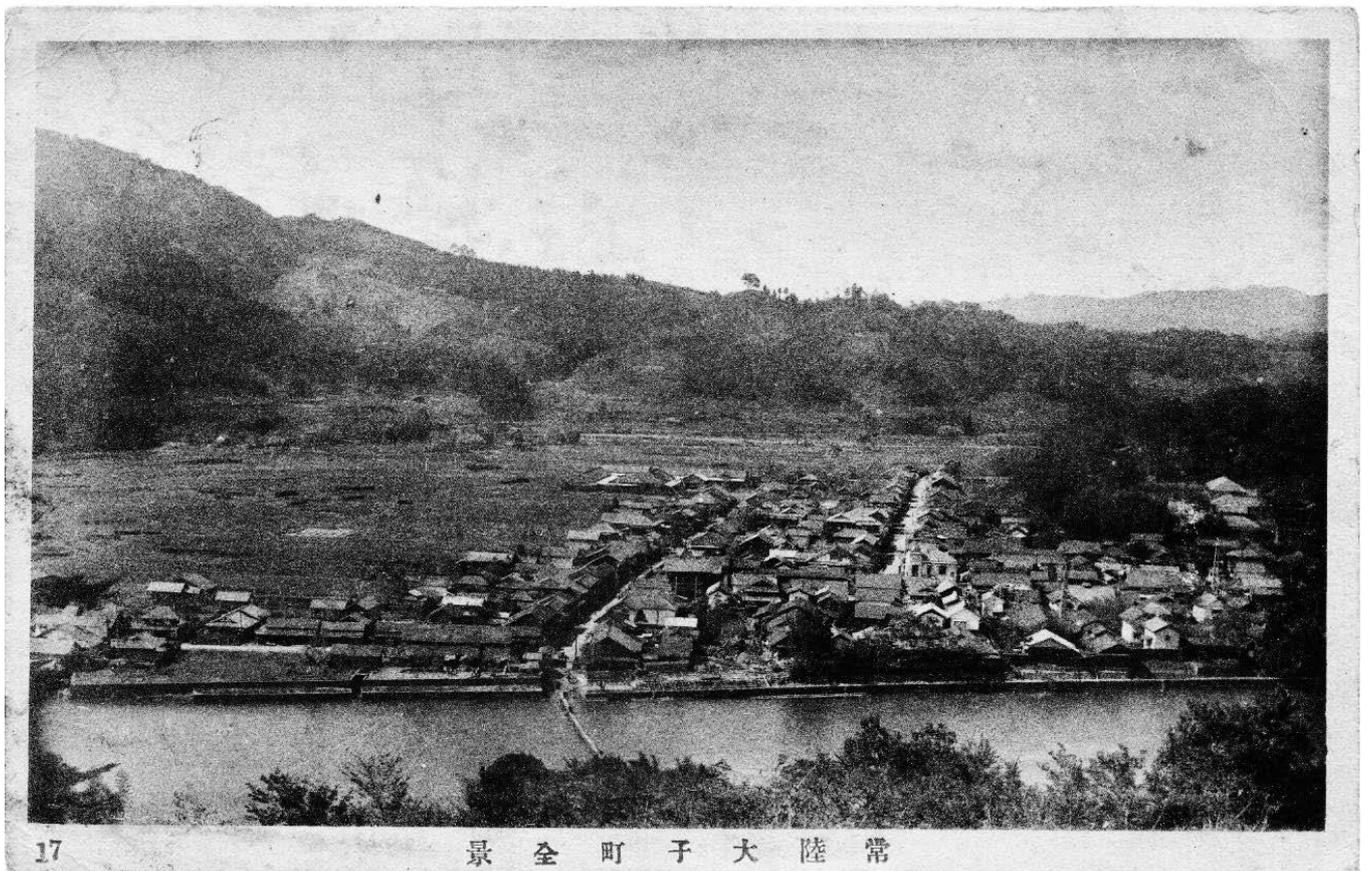
大金 祐介

それは、令和元年九月二十一日、ふるさと歴史講座の準備のため、東京を訪れた時のことであった。予定よりも早く用が済み、帰りの列車まで時間に余裕があったため、神田神保町の古書店街を散策することにした。特にあてもなく散策していたところ、ふと絵葉書を取り扱っているとの看板を目にし、とある古書店に立ち寄った。そこで、偶然、この絵葉書を見つけた。

絵葉書には、大子市街の全景が写っていた。大子市街の全景を写した絵葉書や写真は、それほど珍しいものではない。昭和十年以降に撮影されたものが数多く残されている。私は、初め、この絵葉書をよく見かける昭和十年以降に撮影された一枚であると思った。しかし、よく見ると、そうではなかった。絵葉書には、太田警察署大子分署（大正六年建築）や大子銀行本店（大正六年建築）が写っている一方、菊屋旅館の木造三階建て家屋（大正十一年建築）や大子町役場（大正十二年建築）が写っていないかった。この絵葉書は、よく見かける一枚ではなく、大正六年から十一年までの間に撮影された非常に貴重な一枚だったのである。管見の限り、大正期の大子市街の全景を写した絵葉書や写真は、他に例がない。私は、貴重な絵葉書との偶然の巡りあわせに感謝し、迷うことなくこれを購入した。

昭和十年頃と十五年頃にはほぼ同じ角度から大子市街の全景を写した絵葉書と写真が残されているため、この絵葉書が発見されたことで、大正期から昭和初期までの大子市街の発展を目で追うことが可能となった。私は、これを機に、近代における大子市街の発展の歴史を探ってみようと思う。

（大子町在住）



常陸大子町全景

小生瀬宝泉寺の扉に見る大子の中世(四)

前号までで、小生瀬宝泉寺の扉書から、鳥子(常陸大宮市)に拠点
を置き、和歌を嗜む鳥子江戸氏の姿が明らかになりました。本号で
は、鳥子江戸氏が着陣した小生瀬という場を考えてみたいと思いま
す。

鳥子江戸氏(江戸伊豆)や野口周防守義国が宝泉寺に着陣した永正
七年(二五二〇)は、佐竹氏当主の義舜が依上保を通じて那須方面と
向き合い始める時期でした。義舜は、佐竹氏家中の内紛で孫根城(城
里町)に身を寄せていた延徳四年(二四九二)頃に、下那須氏と結ぶ
動きを見せていますが、実際に那須方面への出兵を意識するのは、
太田城に復帰した文龜二年(二五〇二)以降のことです。その出兵の
際に、軍勢の駐屯地として使われたのが、袋田の月居城とその周辺
地域であったと考えられます。

月居城から、馬頭地域の中心で、中世は武茂氏が基盤を置いた武
茂城(那珂川町)まで続く街道(現在の国道四六一号)沿いには、無数の
中世城郭跡が残されています。現在紹介されているものだけでも、
その数は二〇を超え、城郭密集地帯であったと言えます。また、こ
の街道は江戸時代には「東浜魚荷の道」として、太平洋側の海産物
を下野国に運ぶ道としても使われていたようです。二〇以上の城郭
が全て義舜時代のものであったわけではありませんが、佐竹氏が那
須方面へと抜けるこの道を相当重要視していたことがわかります。
永正十三年(二五二六)に、上那須の浄法寺繩吊(那珂川町)で佐竹
氏・岩城氏の連合軍五千人あまりを破った宇都宮氏は、先述の街道
を通じて、佐竹氏等を追撃します。街道沿いにある城郭群(「近辺在々
所々の要害」)を攻め落とし、あるいは降参させ、月居城まで攻め寄せ
ます(本誌第八三号「戦場となった大子西部の中世城郭」)。佐竹氏側は月居
城で、ようやく宇都宮氏の進撃を止めることに成功したようです。

月居城が突破されたとしたら、小生瀬から「天下野街道」を通過して
(「東浜魚荷の道」と「天下野街道」が交わる地点は、中世には「高柴宿」と呼
ばれる町場があり、交通の要衝でした、佐竹氏本拠の太田に攻め込まれ
ることとなってしまいます。以上から考えると、月居城は太田の北
西方面のルートを押さえる上で、重要な城郭だったのです。

月居城の立地を当時の交通路からも考えてみたいと思います。中
世の大子地域には、南北を貫く「依上道」という道が通ってしまし
た。そのルートは、近世の「南郷道」にほぼ重なるものと推定され
ています。「依上道」と東西を貫く「東浜魚荷の道」は、大子から南
田気地区の辺りにかけて交わります。その道が交錯する地点を監視
できるとともに、「東浜魚荷の道」を押さえる形で立地する月居城
は、まさに大子の交通の中心となる場所だったのです。

那須攻めを実行に移す佐竹義舜は、軍勢を動員する際の駐屯地と
して月居城周辺を選んだものと思われれます。その中で、鳥子江戸氏
や野口氏等現在の常陸大宮市域に基盤を持つ武士の一部が、月居城
近くの小生瀬宝泉寺を利用したのです。月居山の麓には「陣場」と
呼ばれる地名が伝わっています。これはまさに、月居城周辺が軍勢
駐屯のための「陣場」として使われていた名残と言えます。小生瀬
宝泉寺の扉に記された着陣の記事は、小生瀬という地域が、那須攻
めのための駐屯地として使われるような重要拠点の一つであった
ことを示しているのです。

以上、四回に分けて、小生瀬宝泉寺の扉書を紹介してきました。
戦国時代の武士が手遊びに書いた書付から、永正年間の上那須・下
那須の抗争、和歌を嗜む家である鳥子江戸氏の姿、交通の要衝であ
り駐屯地としても使われた小生瀬の立地等、多くの新事実が判明し
ました。この資料の調査・研究がさらに進み、より多くの事実が明
らかとなることを楽しみにしています。(完) (藤井達也)

産地づくりに向けた公的支援の展開（下の四）

―特産品・りんごのルーツを探る（二二）―

りんご栽培過程における病害虫防除作業の重要性については本誌第九号で指摘したが、茨城県特産指導農場も次のような見解を示していた。「気象的に見て暖地のため病害虫の多発は、必至の問題となろう。従ってこの病害虫防除に万全を期さない限り茨城でのりんご栽培は成り立つものでないことを銘記すべきだと思う。…消長の鍵は、この病害虫発生防止が完全に出来るかどうかによって、決定づけられるのではなからうか」（『農業茨城』昭和三十四年十月号）と。こうした認識を背景に、防除機器類の導入や薬剤費等への大子町からの公的支援を受けながら生産者は防除作業を重視し、注力した。しかし、数に限りがある動力式噴霧器を用いた防除作業には、作業効率の点で自ずから限界が生じていた。

昭和三十七年度には、この限界の打破につながるような支援が行われた。当年度の「予算執行実績報告書」には、「新農村建設費」の一環として大子町農協に対して九八万一千円を補助し、「スピードスプレーヤーを購入することによって防除の効率と生産を向上することができた」と記載されている。スピードスプレーヤー（以下SSと略）の活用はりんご生産の先進地ではもはや珍しくなかったようだが（木澤源一郎氏談、大子町域では初の試みであり生産者をはじめ関係者の大きな関心を集めたものと思われる）。

「広報だいいご」第八四号（昭和三十七年八月一日発行）は、SS始動時の様子を「強力スプレーヤー活躍 特産リングゴにテコ入れ」との見出しで伝えている。「町は三十七年度の新農村建設事業の一つとして、果樹園病害虫防除の最せん端をゆく、大型防除機械の購入を計画していたが、この程、大子町農業協同組合を事業主体としてスピードスプレーヤー（共立式SS（2A型）一台を購入した。／このスピ

ードスプレーヤーは茨城県下ではじめての購入で、十アールのリング園をわずか五分で完全に防除作業のできる高性能を発揮している。／この購入費は二百十七万円。そのうち県費七十一万六千円、町費二十一万七千円、計九十三万三千円の助成によって購入されたもので、これからのりんご産地形成に、栽培の近代化、能率化に大きな役割を果すものと期待されている。／このスプレーヤーは、トラクターと薬剤を収納するタンク車との連結されたもので、薬剤はタンクの後部のパイプのノズルから立体的な方向に、強い圧力で噴射される仕組になつている。／ただし、道路上を走る場合は、特車の免許証を必要とするが、運転は案外に容易で、もう黒田宏さんや有賀静さんは、運転技術をマスターして自在にりんごの樹間を縫つて病害虫防除に張切つている。／この機械の成果は、今秋の収穫からみられることと思われる」。

記事からは、「十アールをわずか五分」との表現にみられるように、導入されたSSへの大きな期待感が読み取れる。記事の内容について三点ほどコメントしておきたい。

一つは、導入の時期である。SSには、トラクターでポンプ・送風機・薬液タンク等に乗せた車台を牽引する牽引式、自走車台にポンプ等一式を搭載した自走式、トラクターにポンプ等を設置して薬液タンクのみをけん引する搭載式があり、これらを走行式防除機と総称するが、『一九七五年 農業センサス結果概要』（茨城県総務開発部）によると、個人有の走行式動力防除機は、茨城県内で昭和四十五年に僅か五七台しか稼働していなかった。大子町の例のように共同で利用していた台数は不明だが、SSはまだ導入初期の段階にあつたと言えよう。五十年になると三四九台に増え、この間約六倍の急増をみせている。四十年代後半になつて普及期に入ったとも言える。「広報だいいご」が伝えるように、三十七年の稼働が「茨城県下ではじめて」かどうかは確認できないが、SSの導入が極めて早かつたことは確かであろう。（齋藤典生）

大子の今昔 写真帳

No.2

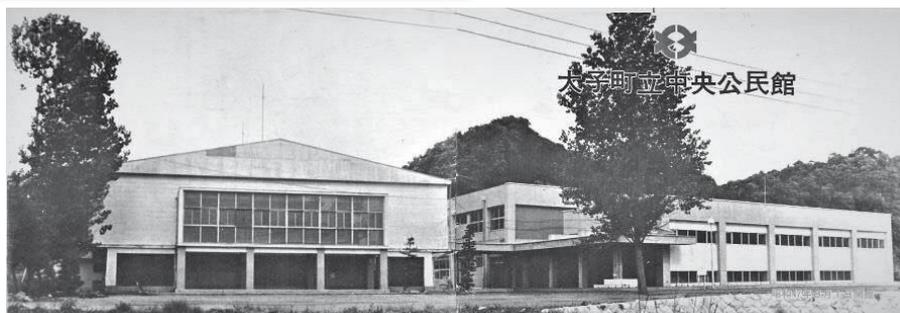
町立中央公民館

昭和47年8月1日開館

建面積1,456㎡

構造 鉄筋コンクリート造 2階建

(現在 本館・リフレッシュセンター・柔剣道場・音楽練習館)



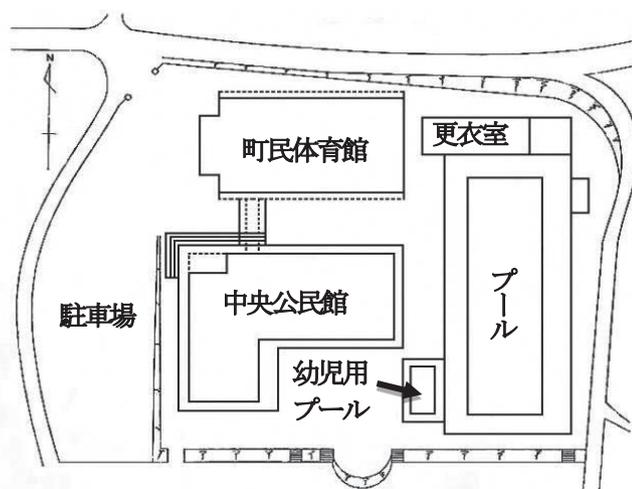
(昭和49年3月30日発行『大子町立中央公民館要覧』より)



現在

公民館の歴史

昭和47年8月1日 町立中央公民館開館
昭和47年10月15日 町営プール完成
昭和48年7月 テニスコート完成
平成元年4月1日 町立柔剣道場開設
平成7年2月1日 町立リフレッシュセンター開設
平成9年 町営プール廃止
平成20年4月28日 町立音楽練習館開設



昭和47年8月1日開館時の配置図

「ほない歴史通信」では、皆さまがお持ちの古い写真を募集しています。「大子の今昔写真帳」に掲載してもよい写真がございましたら、中央公民館の生涯学習担当までお申し出ください。
連絡先 0295(72)1148

編集 大子町歴史資料調査研究会
編集人 齋藤 典生 (大子町歴史資料調査研究員)
井上 和司 (大子町歴史資料調査研究員)
藤井 達也 (大子町歴史資料調査研究員)
藤田 貴則 (大子町教育委員会事務局)
大金 真理子 (大子町教育委員会事務局)
発行 大子町教育委員会
久慈郡大子町大字池田二六九九番地
大子町立中央公民館 ☎0295(72)1148